

# 阪急沿線 76 駅目 ちよい駅 散歩

**からすま**  
烏丸  
KARASUMA

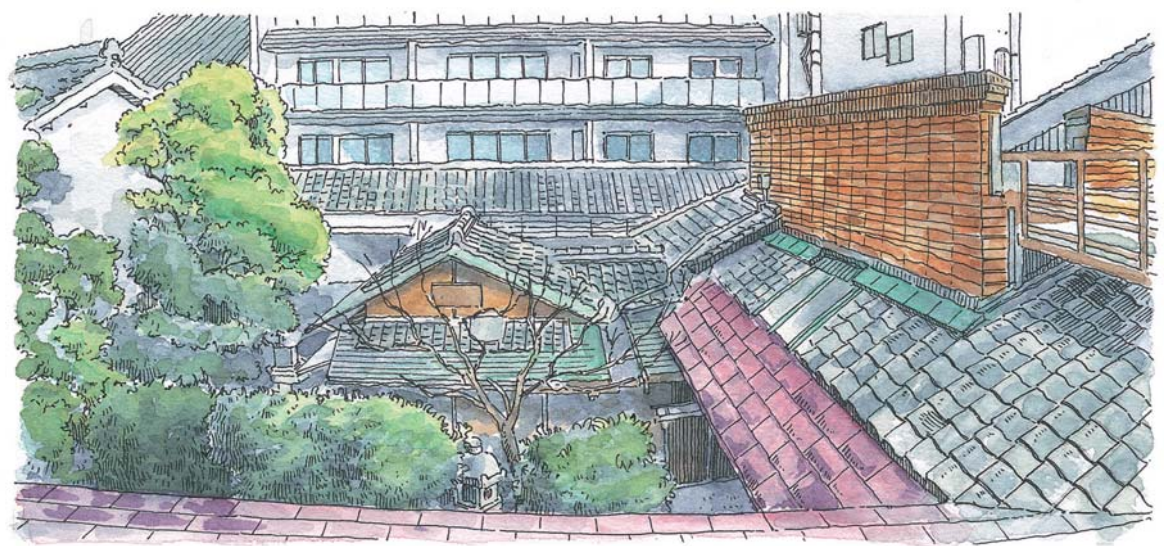
◀ おおみや OMIYA ▶  
▶ かわらまち KAWARAMACHI ▶

京都経済の中心として発展してきた烏丸駅周辺は、伝統的な京都の町並みに、西洋風のハイカラなビルが融合する魅力的なエリア。観光シーズンも落ち着き、静けさを取り戻した町へ、伝統文化と近代化の足跡を訪ねていざゆかん。



**烏丸駅** | 所在地/京都市下京区  
四条通烏丸東入長刀鉾町  
設置/1963年6月17日

## 伝統が息づく町で近代化の足跡を探して

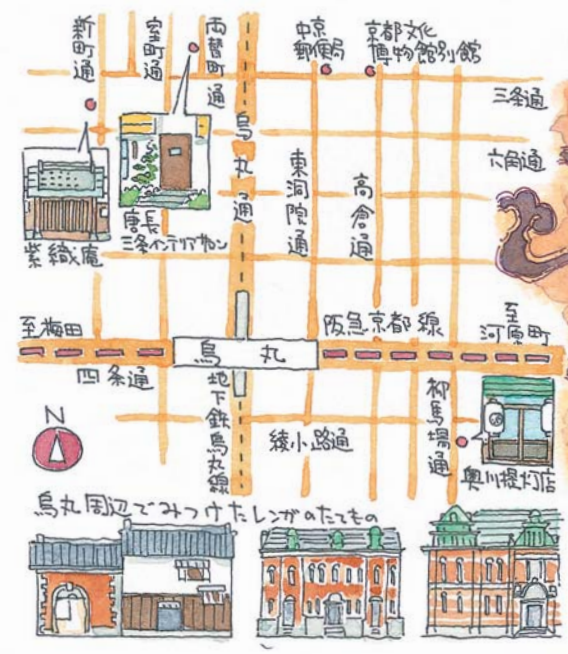


### 紫織庵 近代建築史に名を残す“和洋折衷”の屋敷

大正15(1926)年、室町随一の豪商と呼ばれた井上利助が住宅兼商談場として新築した建物。2階建ての京町家には日本近代建築の父・武田五一の手による洋間が2部屋あり、1階の玄関近くの部屋で商談が、2階では毎夜パーティーが開かれたとか。寄木細工の床に、鎌倉彫の壁、窓にはステンドグラス…贅の

限りを尽くした空間にいと、かつてそこに集った人々のさざめきが聞こえてきそう。祇園祭の山鉦巡行を見るためだけに作られた鉦見台もあって、豪商のおもてなし精神に舌を巻く。

●500円/10:00~17:30(入場は~17:00)/火曜休(前日の月曜が祝日の場合は開館、翌日休) ☎075・241・0215



「天平太電」という文様

壁紙はもちろんのこと、テーブルに敷いたりコースターのような小物として使ったりして、唐紙を使ったインテリアを提案。

唐紙の目 千田堅吉さん

紙の目と唐紙の目、の2つの組み合わせで、たけなを表現します。

千田さんの著作『京都、唐紙屋長右衛門の手仕事』(NHK出版) 千田さんの音が聞こえてくるような文章です。

### 京の町には赤いレンガが良く似合う

京町家に混じって近代的な赤レンガ建築が目につく烏丸駅周辺。三條通沿いには、中京郵便局と京都文化博物館別館が並び、烏丸通にも赤レンガの建物がちらほら。和の情緒漂う町並みには、温かみのある色調の赤いレンガが好まれたのかも!?

### 奥川提灯店 祇園祭の“名脇役”が生まれる場所

四条通から柳馬場通を南へのんびり歩いていくと、軒先に吊るされたにぎやかな提灯に目を奪われる。そと店の中をのぞいてみると、足の踏み場もないほど多くの提灯に囲まれて黙々と作業を続ける職人の姿が。働いているのはたった6人。このわずかな人数で、毎年祇園祭には約3千もの提灯を納めているという。立体に字を入れるのは難しそうだが、迷うことなく筆を進める姿が格好良く、油引きされた和紙に踊る墨痕はなんとも鮮やか。子どもの背丈ほどもある大型の提灯からは力強ささえ感じる。

●9:00~18:00/日曜・祝日は休 ☎075・351・1865

### 唐長 三条インテリアサロン 手仕事のぬくもりを感じる暮らしの提案

日本で唯一江戸時代から続く唐紙屋・唐長の11代目である千田堅吉さん、郁子さん夫妻が10年前にオープンさせたサロンには、ホテル経営者や外国人など、国や職業を越えて唐紙の魅力に心奪われた人々が集う。襖や障子はもちろん、ドアや壁紙、天井、ガラスに挟めば水回りにも。サロンにいと唐紙の用途の幅広さに驚く。「主張し過ぎない柔らかな風合いなので、インテリアとコーディネートしやすいんですよ」と笑顔で教えてくれたのは堅吉さん。江戸時代から伝わる板木に塗料を塗り、文様を和紙に写し取る。簡単そうに見えて文様の濃淡をそろえるのは難しく、指先の感覚だけが頼りの職人の世界だ。木版押しならではの温かみのある唐紙に囲まれていると、不思議と心が落ち着いていく。

●11:00~19:00/火・日曜・祝日は休(不定休あり) ☎075・254・3177

